ひまわり

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ひまわり

【Ｎコード】
Ｎ７７８０Ｃ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
第二次世界大戦後のイタリア。ルチアは夫との約束を守って今日もひまわりの下で帰りを待っている。明日も、明後日も。そうして待ち続けた果てに。映画『ひまわり』からヒントを得ました。

第一章

ひまわり

ひまわりの下で。ルチアは思った。
何時かきっとまた二人一緒になれる、そういう日が来るのだと。
こう思いはじめたのには理由がある。全てはあの時からはじまった。
「あのひまわりの下で」
ルチアは幼馴染みのフランコにそう声をかけられた。
「大きくなったら結婚しないか？」
「結婚？」
「ああ、ひまわりの下でな」
ルチアに顔を向けて言う。この時二人はまだ少年と少女だった。
まだ結婚するにはまだ早い、そうした歳だったが彼は言ってきたのだった。
「結婚しよう。いいか？」
「断ることは許さないのでしょ？」
フランコに顔を向けて問う。彼の強引な性格を見ての言葉である。
「どうせ」
「ああ」
そして彼もそれを認める。最初からそのつもりだった。
「その時になったらな。いいな」
「ええ、わかったわ」
ルチアもその言葉に頷いた。二人は今夏の終わりのひまわり達を見ていた。ひまわりは何処までも高く黄金色の花を咲かせていた。
それはまるで無数の太陽がそこにあるようだった。
「その時になったらね」
「約束だぞ」
彼はまた言った。

「その時になったらな」
「待ってるわよ」
ルチアはそう告げる。
「その時を」
「もうすぐだ」
フランコはひまわり達を見て言うのだった。
「もうすぐ結婚出来る歳になるからな」
「そうね。けれど大丈夫なの？」
彼女は今度はこう尋ねてきた。
「何がだ？」
「もうすぐ。戦争がはじまるかも知れないわよ」
この時ドイツでも二人がいるイタリアでも所謂全体主義国家が政権を握っていた。ヒトラーもムッソリーニも野心に燃えていた。ムッソリーニはローマ帝国の復活を目指して軍備を整えていた。行進までかつてのローマ帝国風にして意気をあげていたのだ。意気をあげていたのは彼だけだという問題はあったが。
「それでもいいの？」
「その時はまず戦争に行く」
フランコは一言だけ告げた。
「それからだ。いいな」
「ええ、わかったわ」
ルチアはその言葉にこくりと頷いた。
「じゃあ待っているから」
「何があっても生きて帰って来る」
彼は強い言葉で言うのだった。
「戦争になって兵隊に行ってもな」
「何があってもなのね」
「そうだ」
彼はまた強い声で言う。
「何があっても俺はこのひまわりの下に帰って来る。御前はずっと

ここで待っていろ」
「このひまわりの下で」
ルチアはその言葉を聞いてまたひまわりを見た。黄金色の太陽に負けない程の強い輝きを放ち続けている。それを見ていると彼の言葉を信じたくなった。
「いいな」
「ここで待っていればいいのね」
またフランコに問うた。
「それで」
「それだけだ。俺もここに来る」
やはり言葉には迷いも何もない。そこには確かな自信さえあった。
「その時に結婚だ」
「絶対よ」
ルチアは念を押すように言ってきた。
「そうでなければ私だって待たないから」
「俺は嘘はつかない」
フランコは決して嘘はつかない。彼はプライドの高い男だったからだ。だからこそ信じることができた。そう、ルチアは彼を信じていたのだ。
「だから」
「待ってるわよ」
程なくして戦争がはじまりフランコは戦場に向かった。自分から志願してだ。
「志願したのね」
「ああ」
またひまわりの前にいた。もうひまわりの季節は終わり種まで落ちていた。花も枯れて寂しい姿をそこに見せているだけだった。
「行くなら自分から行きたい」
「勇敢って言うべきかしら」
「いや」

しかし彼はその言葉には首を横に振った。違うというのだ。

第二章

「俺は自分から義務を果たしたいだけだ」
「そうか」
「そうだ。だからこそ」
彼は言う。言葉にも迷いがない。
「自分から行くんだ」
「偉いわね」
「そうか？」
ルチアの問いにいぶかしむ目を見せてきた。口は真一文字に結ばれていて目だけが彼女を見ていたのであった。それでも強い目であった。
「俺は俺のしたいようにしているだけだがな」
「したいようになのね」
「御前ともな」
枯れたひまわりを見て言う。ひまわりは枯れて命が終わっているかのようだったが彼はそこに枯れたものとは別のものを見ていたのだ。
「このひまわりが咲く時に帰る」
それがフランコの言葉であった。
「いや、咲かせてみせる」
こうまで言う。
「俺が帰って来た時にな」
「言うわね。咲かせるなんて」
今の言葉には思わず笑った。
「そこまで自信があるのならね。私も安心できるわ」
「御前が何も悩むことはない」
傲慢とすら思える言葉であった。しかしその言葉がルチアを安心させるのも事実だった。

「何もな」
「わかったわ」
こうして彼は戦いに向かった。イタリアは最初はフランスに攻め込みそれからバルカン半島に、北アフリカに、ソ連に。次々と戦線を拡大させていった。拡大させる度に敗北を重ねてドイツ軍の足手纏いになっているのであった。ドイツ軍が呆れる程弱かった。
「また負けたらしいぞ」
「大勢捕虜になったらしいな」
そんな話が村でも話されていた。イタリア軍は連戦連敗で勝つことすらなかった。そうして遂にはシチリアまで奪われて呆気なくイタリア本土にまで上陸された。
ルチアの村はさして重要でもなくドイツ軍も連合軍も殆ど無視していた。ドイツ軍の築いた防衛線も破られここでも戦局はイタリアにとって悪かった。
そんな中ルチアはじっと待っていた。来る日も来る日もひまわりのところで立ってフランコを待っていた。村人達はそんなルチアに対して問うのだった。
「フランコを信じているんだね？」
「ええ」
ルチアの言葉にも迷いはなかった。彼女はフランコが必ず帰って来ると信じていた。だから今もこうして待っているのであった。
「必ず帰って来るわ」
「そうか。そうだよな」
「きっと」
村人達もその言葉を信じることにした。だがここでルチアの父が言うのであった。
「フランコはな」
「何？」
「安心していい」
娘に対して言ってきた。

「あいつは絶対に帰って来る。そういう奴だ」
「お父さんも信じているのね」
「当たり前だ。俺だって皆わかっている」
彼もフランコは昔から知っていた。だからこそ信頼していたのだ。そうした意味では彼もルチアも同じものを見ていたのである。
「戦争だって何時か終わるさ」
今度は戦争について言ってきた。
「負けるかも知れないがな」
「負けるの？この戦争」
「イタリアは昔から戦争には弱いんだ」
といっても彼にしろ知っているのは前の戦争だけである。前の戦争ではドイツとオーストリアを裏切ったのだがその相手に盛大に負けているのだ。しかしドイツとオーストリアがイギリスやフランスに降伏したので何とか勝ち組には残ったのである。戦争には惨敗であったが勝ち組には残ったのがイタリアらしい。
「だからな。今度は」
「危ないのね」
「運がよかったらまた勝ち組だろうけれどな」
実際に運がよかったというよりは口八丁手八丁で生き残ることになる。しかしこの時はまだそれはわかってはいない。何しろ戦う度に捕虜を大勢出すわパルチザンに殴られた兵士が泣き出してその為にパルチザンが扱いをよくしたという話まであるのだ。とにかくその戦争での弱さは折り紙付と言っていいものであった。
「まあ何があっても生き残るさ」
「イタリアは？」
「イタリアだぞ」
父は言った。
「何があっても生き残るさ。あいつもな」
「フランコも」
「そうだ。だから御前はここで待っていろ」

「ええ、待っているわ」
ひまわり達を見て答える。答えながらも見ている。そうしてフランコを待つのだった。

第三章

それから父の言葉は当たることになった。イタリアはここぞという絶好のタイミングで何時の間にか連合国側になっていた。そうして見事に生き残り勝ち組に乗ったのであった。

「おい、戦争が終わったぞ！」

それから村で声が鳴り響いた。

「もうこれで戦争なんかしなくていいんだ！」

「ほら見ろ、これ！」

新聞を見る。するとそこには確かに戦争終結のニュースが書かれていた。それはルチアにもはっきりと読めた。

「これで後はフランコだけだな」

ルチアの父がまた娘に声をかけてきた。

「そうね。今どうしているかしら」

「アフリカにいたらしい」

そう娘に教える。

「アフリカに？」

「そこでも随分色々あったがな。けれどな」

「わかってるわ」

父に笑顔で応える。

「信じているから」

「そうだ、ずっと信じているんだ。戦争が終わったんだ」

また娘に告げる。やはりひまわりの前にいる。ひまわりはまだ咲いてはいない。しかしルチアはそこに満開のひまわりを見ていた。フランコと見たあの満開のひまわりを。

やがて戦場から男達が帰って来た。その多くが捕虜になっていた。

「いやあ、参ったよ」

「イギリスの飯ってまずくてな」

そんなことを言いながら戦場のことを語る。何処か微笑ましい姿

であるがやはりそこにもフランコの姿はなかったのであった。
普通ならここで不安に感じるところであった。しかしルチアは違った。
じっとフランコを待っていた。ひまわりの下で。そうしてひまわりが咲いて満開の太陽の輝きを見せたその日の昼のことであった。
「やっぱりそこにいたか」
彼の声だった。
「探す必要はなかったな、やっぱり」
「ええ」
ルチアもその言葉に笑顔で応える。するとそこにはフランコがいた。
イタリア軍の軍服を着てひまわりの側に立っている。その顔は少しやつれていた。
「帰って来るってわかっていたわ」
「信じてくれていたか」
「ええ。だって貴方言ったじゃない」
そう彼に言葉を返す。
「絶対に帰って来るって。だからその言葉信じていたのよ」
「ああ。俺は最初からそのつもりだった」
「帰って来るって？」
「そうだ。といっても本当はもっと早く帰って来れた」
「どういうこと？」
その言葉には首を傾げさせる。何故彼が今そう言ったのかわからなかった。
「もっと早くって」
「捕虜になってな」
ここでこう言ってきた。イタリア軍は捕虜になる者の多い軍隊であったのは先に言った通りである。彼もその一人だったのだ。
「そうだったの」
「ああ、北アフリカでな。それからイタリアが降伏するまであれこ

れと盥回しにされた」
「別に何もされなかったの」
「向こうは俺達には結構優しかったんだ」
彼はそう説明した。ドイツ軍の捕虜には時折虐待も見られた。とりわけ東部戦線でソ連軍に捕まった者達は悲惨であった。しかしイタリア軍に関してはそこまではいかなかった。それはイタリア軍がドイツ軍のように手強いわけでも頑健な性質を持っているわけでもなかったからだ。悪く言えば舐められていたのだがそれがかえって彼等の身を守る結果となったのである。
こんな話がある。イタリア人ではなくイタリア系アメリカ人に関するものだ。時のアメリカ大統領ルーズベルトはマイノリティへの差別には反対の立場を取っていた。アフリカ系やヒスパニック、中国系、とりわけユダヤ系への差別には反対していた。その中にはイタリア系も含まれていてこう言ったのである。
「イタリア人達は皆オペラ歌手みたいなものだよ。心配することはない」
彼個人の偏見も混ざっているが当時アメリカに根強かったイタリア系への偏見に反対する言葉である。なお彼の人種意識はいささか歪でありこう言ったそばからドイツ人は違うと言い日本人への敵視も根強かった。だがこれはあくまで余談である。
「けれど何かとイタリア各地を移動させられてな。帰るのが遅れた」
「そうね。けれど」
「何だ？」
「いい時に帰って来たと思うわ」
にこりと笑って彼に言ってきた。
「丁度いい時にね」
「それはどうしてだ？」
今度はフランコが首を傾げさせた。そうして彼女に問うた。
「どうして俺がいい時に」
「あれ見て」

ここでひまわり達を指差してきた。
「ひまわり達。どう？」
「ひまわりか」
見れば見事なまでに咲き誇っていた。それは今までにない程であった。黄金色の光が地に満ちて眩しいまでだった。
「こんな奇麗なひまわり達は見たことがないな」
「そうね。まるで貴方が帰って来たのを祝ってくれているみたい」
ルチアはそうフランコに言った。
「だからね。また約束があったわよね」
そのうえでまた言う。
「帰って来たら」
「結婚だったな」
「そうよ。このひまわりの下で。覚えているわよね」
「だから俺は帰って来た」
彼はまたそれを言った。
「御前と結婚する為に。じゃあ村の皆を呼ぼう」
「ええ。そして神父様も」
「戦争も終わった。俺達を邪魔するものはもう何もないんだ」
「そうね。何も」
「だから。これからはずっと二人で」
「ええ。永遠にね」
二人はひまわりの下で誓い合う。約束は果たされた。フランコもルチアも咲き誇るひまわりの下で何時までも笑っていたのであった。

ひまわり　　完

２００７・５・９

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7780c/

ひまわり

2010年10月8日15時04分発行